

修徳塾 心得と

日新公 いろは歌

監修 青木 幹
執筆 川村 景吾

監修挨拶

青木 幹

私は遠い鹿児島県の薩摩半島（桜島のないほうの半島）の加世田で生まれ、十八歳まで育ちました。この加世田は島津忠良が老後隠居した土地です。私が小さい頃までは各家には日新公の写真と西郷隆盛の写真が飾ってあったものです。それほどに鹿児島では県民全員から尊敬され慕われていたお二方です。男女共学の高校生でも、女学生とはほとんど話もしたことがありません。同じ部落で幼馴染ですから話をしながら仲良く帰ろうものなら先輩から鉄拳制裁を受けました。それほど封建時代の悪弊を踏襲していました。事に触れ、折に触れ日新公いろは歌を口ずさみながら育ちました。私の生き方の中にはいろは歌に負うところが多くあるように思うのも三つ子の魂でしょう。

かつていろは歌の小冊子を取り寄せて修徳塾の主だった人に配布して読んでもらいました。また塾報にも毎号一首ずつ取り上げ解説してきました。一年位前に川村景吾君がこれをなんとか修徳塾の中に残して伝えて行きたいと発心して、努力の甲斐あって見てくれと言う事で私の解釈、言い回しも加えてお互い協議の上脱稿いたしました。

私は小学一年の時、敗戦を味わいました。私は知覧と万世の特攻隊の姿を毎日見ていました。鹿児島は孟宗竹が多いのですが、その竹すれすれに長い鉢巻を締めて手を振りながら飛び立っていききました。その飛び立つ人たちは色んな考えを胸に秘めて二度と帰らない祖国を守る為に身を投げ出した人たちです。今思うにこれも今自爆テロが横行してはいますが、この人たちも教育のなせる業です。如何に教育が大切なことか考えさせられます。修徳塾は取るに足りない小さな道場ですが、継続は力と言いますが優秀な塾生をあまた輩出してきました。これからも後輩諸君が指導宜しきをえて発展成長するためのバックボンにこのいろは歌なら絶対に間違いは無いと信じております。

文末になりましたが、諸先輩がたの著書もあまた参考にさせていただきましたことをここに謹んで御礼申し上げます。

序

あおきかん

この本に書かれている内容は修徳塾の創始者 青木幹先生が塾生に対して日頃の心構えとして練習後に復唱させているものです。また、平成一七（2005）年の夏合宿時に道歌を作られ、それに伴い先生が^{じっしんこう}お選びになった歌の基になったいろは歌を解説した本です。

この本の大半をしめる日新公いろは歌（島津いろは歌）は先生の出身地である鹿児島県に古くから伝わる教育理念を歌ったものです。戦国初期の薩摩（現在の鹿児島県）を治めた^{ぐこく}しまづただよし

島津忠良公が作成しました。国を統一し、家臣団を教育するのが目的でした。隠居後、愚谷^{けんじっしんさい}

軒日新斉を名乗ったことから、「日新公いろはうた」とも呼ばれています。この歌は戦国時代での教育と なって いるため、現在では通じ得ないものもありますが、空手という武道を通じて解釈できるように努めました。

また、仮名遣いなどは日新公を祀っている竹田神社（鹿児島県加世田）の歌碑を参考にしました。

ページごとに心得・歌をまとめました。子供（中学生程度）向け解釈に続き、ページの後半には保護者の方へのお願いや所感を併記しています。この本に書かれている心得・歌を常に意識し、立派な人材になってもらうことを期待します。

目次

監修挨拶

序

修徳塾 道歌と心得

修徳塾 道歌

修徳塾 心得

日新公いろは歌 (解釈編)

日新公いろは歌 (実践編)

付録

修徳塾道歌・心得と日新公いろは歌

空手道二十訓

修徳塾

道歌と心得

ただ威謝無罣礙故 無有恐怖

罣けい礙げいはひっかかること、罣げい礙げいはさまたげる事を指します。無罣礙むけいげいは心を覆うものなしです。無有恐怖は恐怖があることではないと云う事です。般若心経を讀んで罣礙むけいげいを無するなんて凡人には出来ないのが当たり前。では、誰でも出来る威謝いしやを全物にそそいで少しでも心を覆っているものを振り払って試合に臨もう。そうすれば相手に対する恐怖も少なくなり思いつきり戦える。戦う時も君は私の敵ではない。お互い空手の技をみせっこしようと思おうようにして思いつきり試合をしよう。

修徳塾道歌

おき とく ね からてみち どうしつど まなびや
修めよ徳 練れよひたすら 空手道 同士集う うれし塾

あおき かん
青木 幹

この歌は、修徳塾を開かれた青木幹先生が平成一七（2005）年に道歌として作成されたものです。歌の最初から塾名に込められた思いを説き、最後の塾を「まなびや」と唱えることで、この空手塾を単なる武道の練習の場としてではなく、各々が互いに刺激しあい共に成長していくという場であることを表現していると思います。

「練れよひたすら空手道」は練習にのめりこめというのではなく、人として生きていくための道、「空手道」に対し、一心になり心身ともに、また文武両道でいくことが望まれていると思います。

塾の旗に染められて、また合宿では毎年読みますが、各人が「修徳塾」の名前を背負っているときは常に意識してもらいたいと思っています。

修徳塾心得

空手とは からて 人に打たれず ひと う 人打たず ひとう 事の無きを こと な 基とするなり もと

しんどうじねんりゅう 神道自然流 こにし 小西 やすひろ 康裕

修徳塾が塾として発足する前から、練習の後に復唱した心得です。空手の一派である神道自然流の開祖小西先生の言葉です。

空手というものは、他人から攻撃をされないように身を守る手段であり、ましてや人に危害を加えるものではない。空手を習得することで自分や他人がお互い争わないようにする事が根底にある、とっています。

「弱い犬ほどよく吠える」という言葉にもありますが、空手道を修得し、自分に自信のある人はおおっぴらげに自分の力を誇示こじしません。練習をして強くなることも重要ですが、自信を持ち、どうどうとすることで却って何事もなくてすむようになることを目的としています。

個人的には復唱しなくなったのは残念ですが、空手を行う、教える時には常に頭にある教えます。

一、和顔愛語

「和顔」とは、穏おだやかな顔、優しい顔を意味しています。また、「愛語」とは、愛いしみ（相い手に対して愛情）のある言葉を表しています。「和顔愛語」とは常に穏やかで優しい表情をし、相手に対して敬意をもった言葉を使うという意味です。相手にとって不快な表情や荒げた、汚い言葉を使わないようにしましょう。次の「和して同ぜず」にも繋がりますが、相手を諫める（悪い点を直してもらおう）事も含まれます。その場合も相手の人格を尊重し、認めたとでなければ良い方向には行きません。言葉の力は強く、その人の生き方をも左右します。言葉使いは長年培つちかってきた自分の生活が表われます。ですから、つね日頃から良い表情、美しい言葉を使うように努力しましょう。

【保護者の方へ】

この「和顔愛語」は元仏教用語です。辞書などによっては「わげんあいご」と表記されているものもあります。ご家庭でも、また近いものだからこそ油断せずに乱暴な言葉、汚い言葉で話さないように教育してください。いろは歌にも出てきますが、全てに対して敬う気持ちが大変と説かれています。子供たちのより良い未来のために、和顔愛語を徹底させましょう。

一、和して同ぜず

「和」とは仲良くすることを意味しています。「同」は人と行動を共にすることを意味しています。「和して同ぜず」とは、どんな人とも仲良くしますが、誤った行いに対して自分が賛同しない事を表しています。同じような意味の「和」と「同」の文字ですが、この言葉になった時大きな差が生まれます。どんなに仲の良い友達であっても、その友達が悪いことをしている時には自分を強く持ち相手を諫める（悪い点を教え、直してもらおう）ことが必要です。そして、友達に誘われ、いじめや万引きなどの悪い事をすすめられた時には勇気を持って止められる。それでも相手が止められない場合には、絶交などされたとしても自分は関与してはいけません。それだけ強い自分を持って欲しいと思っています。

【保護者の方へ】

なあなあ主義になりつつある現代で自分をしっかり持つと言うことはとても難しいことです。いじめや万引きなど悪友ができないように子供に対して常に関心を持つことは元より、家庭でも事の善悪について良く教育していただきたいと思っています。悪事に対して勇気をもって意見できることは子供にはなかなか難しいことです。常に子供とのコミュニケーションを保ちながら、事の善悪、勇気ある行動を教えてあげてください。

一、勸善懲悪

勸善とは、良い行いはすすんで行うようにしようという意味です。懲悪とは悪い考えに対し自分で自分を懲らしめようという意味です。この言葉は、良い考えをする自分を成長させ、そして悪い考えをする自分を自ら懲らしめようという意味になります。頑張る自分、人に親切にするなど良い心がけをした時は自分を褒めてさらに進んで行うようにしましょう。逆に怠け心、人に迷惑をかける行いをしそうな時は自分を懲らしめ、深く反省しましょう。

【保護者の方へ】

中国の古典「左伝」と仏教の因果応報（自分の行いは自分に返る）から発生した物語の筋書きを意味しています。現代では水戸黄門など対外的勸善懲悪型のドラマが分かりやすいと思います。

塾の心得として、読み解きのように自分自身への心がけを意味しています。常に事の善悪を判断し、良きことは進んで行い、悪き考えは自分自身で諫め、行わないよう話をしてください。

じっしんこう
日新公いろは歌

解釈編

いにしへの道を聞きても 唱へても わが行ひに せずばかひなし

古の道を聞いても 唱えても 我が行いに せずは甲斐なし

「古」とは昔を意味しています。「道」とはその人の人生観、その物の本質を意味しています。武道、空手道の「道」と同じです。古くから言われている教えやその人からのアドバイスを聞いたり、読んだり、唱えたりしても、実際に自分で行動をしなければ、それは全て意味のないことになってしまう、という意味になります。

普段道場などで復唱している心得や、合宿などで説明される歌、または学校などで先生からの教えなど、その場限りで終わらせていませんか？ 諺など先人の言葉からも多く学ぶことでしよう。しかし、ただ読めるだけ、書けるだけ、言えるだけでは一切が無駄になります。一つひとつ自分の身で、生活に生かしていきましよう。

【保護者の方へ】

最初から、手厳しい一言です。私たち大人や指導する立場の者が特に痛感する言葉だと思っています。「門前の小僧、習わぬ経読む」という諺もあり、復唱も重要だと思っておりますが、唱えさせてだけでも意味はないだろうと思っております。時々自分を振り返り律しながら子供たちに教えを広げていければと思います。ただ意味もなく唱えられるだけでは意味のないものですから。

楼ろの上うえも ははににふふのの小こ屋やも 住すむ人ひとの 心こころにこそそは たかきたかいやいやししき

楼ろうの上うえも 埴はに生ゆうのの小こ屋やも 住すむ人ひとの 心こころにこそそがが貴たかきたか（高たかき）卑いやししき

「楼」とは何階建てのもの立派な建物を意味しています。「埴生の小屋」とは逆に粘土のよう
な土で出来た粗末な建物を意味しています。人の価値とは住んでいる建物の高さ（立派さ）
ではなく、その人の持っている心が貴たかきこころやし 志（良い心がけをしている）か、卑いやしい（ずる
い、人として程度の低い）考えをしているかで人の価値は決まるものという意味になりま
す。

世の中お金が全てではありません。お金を持っているから偉い、貧乏人だから価値がない
という考え方をしていませんか？人生は身なりではなく、志と行いで決まります。貴たかきこころやし志
をもちましよう。

【保護者の方へ】

学歴社会・資本社会と厳しい世の中ですが、知らず知らずにそのような目線で人を評価し
てはいないでしょうか。確かに高学歴、高所得者はそれなりに努力した結果だと思いき
が、人の真価は志にあると思います。この歌にしても建物の「高さ」と人の徳を表す「貴
き」を兼ねつつ絶妙な表現をしていると思います。努力して財産を築くのも重要ですが、
志に重きを置きたいものです。人の作り出した、ある意味欲という色眼鏡で物を見ていな
かったか、考えさせられます。

はかなくも 明日の命を たのおむかな 今日も今日もと 学びをばせで

はかな

あす いのち

たの

きょう きょう

まな

儂くも 明日の命を 頼むかな 今日も今日もと 学びおばせで

「儂く」は頼りにならないことを意味しています。「頼む」とは当てにしている事を意味しています。明日、生きていくかどうか分からないのに、明日が来るものと信じているのはな

んと頼りない生き方ではないか。明日へ先延ばしにする考えは間違っている。毎日悔いの無いように、学び続ける心がけが重要であるという意味です。

面倒なこと、やりたくないことなど「明日でいいや」と先延ばしにしていますか？人生は何があるかわかりません。道（空手などの本質）を歩んでいくには学び続けることが必要です。日々の努力を行いましょう。

【保護者の方へ】

いちごいちえ

茶道の心得に「一期一会」というのがあります。今おもてなしをしている人は次に会えないかもしれないから、悔いの残らぬように接待しよう、という心構えです。我々大人でも後々に先延ばししていることが多くあり、痛い目を見ているにも関わらず同じ過ちをしていることも多々あると思います。特に未来ある子供にとって「明日」という言葉は輝かしい言葉に聞こえていると思います。ただでさえ儂い人生ですから一日一日を大事にしたいと思います。また「逆に、明日に夢を託し努力する事もまた人間の良さ」とも師より教えをいただきました。

似^にたるこそ 友^{とも}としよけれ 交^{まじは(わ)}らば われにます人^{ひと} おとなしき人^{ひと}

似^にたるこそ 友^{とも}とし良^よけれ 交^{まじ}わらば 我^{われ}に増^ます人^{ひと} 大人^{おとな}しき人^{ひと}

「我にます人」とは、自分より優れている人を意味します。「大人しき人」とは、穏やかで思慮深い（よく考えて行動する）人を意味しています。自分と境遇・性格の似ている人が友達になりやすいが、自分より優れている人、穏やかで思慮深い人と付き合った方が良い。そうすれば、自分も自然とそのような人たちに近づいていけるのだから、という意味になります。

また、周りの友達のために自分が大人しく成長するための努力も必要です。そうすること、その様な人たちと共に成長が期待できます。逆を言えば、格好や言動がだらしない人と友達していると自分もそのようになってしまいう事も意味します。自分は友達に対して良い（特に大人しい）人間ですか？友達は選び、自分も良い友達でいられるようにしましょう。

【保護者の方へ】

「類は友を呼ぶ」、「同じ羽の色を持った鳥は群れたがる（海外の諺）」の諺にもありますが、同じ資質の人は自然と集まりやすいものです。修徳塾に集まり辞めずにいるのは良い人間関係が築けている証だと思っています。多くの書物では「友は選べ」と解説してありますが、ここでは敢て自分が変わっていく解釈を加えました。人を切り捨てるのではなく、子供たちがそれぞれ改革の中心となっていけるように期待しております。

ほとけ神かみ た 他にましまさずひと 人よりもこころ 心に恥ぢよは 天地よく知るてんち し

ほとけかみ た ましま 仏神 他に在さずひと 人よりも こころ 心に恥じよ てんち 天地よく知るし

「他に在さず」とは、そこ以外には存在していない事を意味しています。その後「人よりも」が来ることにより、自分の中以外には存在しないという意味になります。神様や仏様は像や絵に存在するのではなく、自分の心にいるものだ。人が見ている、見えないではなく、常に自分の信じる道に正直に生きていこうという意味になります。先生が見ていないからと練習の手を抜いていませんか？実は先生はよく見えています。そして、言わなかったとしても審査や試合で必ず明らかになります。誰に対して恥ずかしいと思うより、自分に対して恥ずかしくない行動をしましょう。

【保護者の方へ】

てんしるちしるわれしるししる
中国の古典に「天知地知我知子知」という言葉があります。これは「誰も見ていないから」と賄賂を届けに来た者に対して「誰も見ていないというが、天と地の神様はご存知でありそれ以前に私とあなたが知っているではないですか」と役人が応え、使者を返したという故事です。人は誰でも良く見られたいという願望があり、裏を返せば見ていない所では気を抜いてしまいがちです。しかし、何故かそのような事は誰かに知られたりしていますし、それ以上に自分に対して偽りを生むということは卑怯な行為だと思えます。難しいことです。子供たちに説きましよう。

下手ぞとて 我とゆるすな 稽古だに つもらばちりも 山とことこの葉

下手ぞとて 我と許すな 稽古だに 積もれば塵も 山と言の葉

「下手ぞとて」は、下手だからという理由を言っただけという意味です。「我と許すな」は、自分に対して甘い気持ちになる事を意味しています。そして最後は「塵も積もれば山となる」という諺を指しています。自分がいくら練習しても「どうせ上手くならないから」「やっても無駄だし」とか言い訳をして稽古の手を抜いてはいけませんという意味です。自分の未熟さに甘えて、練習の手を抜いていませんか？そのちよつとも長く続けていくと大きな差になります。きっかけはなんであれ自分のための空手です。努力は必ず実り上達しますので頑張りましょう。

【保護者の方へ】

冒頭の諺は、良い意味で「こつこつ積み重ねていけば、その努力は大きなものとなる」となりますが、ここでは戒めを込めて今回は手を抜いたことも積もると大きな差となる意味で書いてみました。原典は仏教に「譬如積微塵成山 難可得移動」（大智度論）とあり、後はわかりませんが善悪両方の意味で読める気がしました。空手などの練習も積み重ねれば大きなものとなりますし、またその逆に小さな気の緩みも積もれば大きな差となります。こつこつと、そしてまじめに生活してくれればと思います。

科とがありて 人ひとを斬きるとも 軽かるくすな いかす刀かたなも ただひと一つなり

科とがありて 人ひとを斬きるとも 軽かるくすな 生いかす刀かたなも ただひと一つなり

「科」とは罪がある人を意味しています。たとえ死刑に値する罪を犯した人がいたとしても無闇に命を奪ってはならないという意味です。誤った自分ひとりの軽率な判断が一人の命と多くの人の人生を狂わせてしまうことになります。

たとえどんなに相手に非があろう（悪かった）としても、無暗やたらに暴力をふるってはいけないという事です。武道は人を傷つけることもできませんが、本来は身を守るものです。更に言えば、自分をいたため、強い心と体を造るための手段です。武道を志す者は活人剣（人かつじんけんを傷つけるのではなく、守る力）を目指し、心身ともに強くなりましょう。

【保護者の方へ】

「人を斬る」は現在では罷免など罰を与えることとだと捉えられます。人を斬る刀と身を守る刀という物理的な意味を指していると思います。一方人材の適用と捉えることもできると思いました。ある人物に対して処断するだけでなく、更正させる事でまた何か自分の役に立つブレイクになることもあると思います。人を見るときに一面だけで判断するのはよくないと言っています。子供を叱るにしても感情的にならず、また躰と称した暴力などにならないことを切に願います。

知恵能は 身につきぬれど 荷にならず 人はおもんじはづるものなり

知恵能は 身につきぬれど 荷にならず 人は重んじ 外るものなり

「知恵能」とは、知識や能力・技術を意味しています。「重んじ」とは、尊ぶ（尊敬する）事を意味しています。そして「外る」は外にはみ出るという意味です。知識や技術は、修得しても物理的なものが増えるわけではありません。そして、その知識や技術を持っていれば、人は評価してくれます。そして、自分が誇示しようとしなくても自然に品格を醸し出す（自然と出てくる）という意味です。帯の色は自分の努力の結果です。その帯を誇りに一生懸命に努力していますか？帯にあつた立派な貫禄をにじみ出してください。

【保護者の方へ】

知恵とは、本来「知識」とは別物で知識・教養を活かした考え方を意味しています。しかし、敢て解りやすくするために知識と説明してみました。外るとは、自然と醸し出されるという意味です。普段の会話や、立ち振る舞いに現れます。知識や技術の裏付けによる自信に満ちた立ち居振る舞いが意識せずとも出来るようになります。常に向上心を持って学習、練習するように導いてあげればと思います。

理も法も 立たぬ世ぞとて ひきやすき 心の駒の 行くにまかすな

理も法も 立たぬ世ぞとて 曳き易き 心の駒の 行くに任すな

「理」とは人の正しい考え方を意味しています。「法」とは、人が生活していく上で守っていく約束事（法律）を意味しています。「駒」とは、乗っている馬をあらわし、「心の駒」とは自分の考え方を意味しています。人の正しい心や、法が守られない荒れた世の中だからとこそ、「心の駒」即ち自分をしっかりととうと言う意味です。

人は気を抜くと楽な方に流れていきやすい生き物です。嫌なことに対して逃げていませんか？自分の心に鞭を打ちまっすぐいきましよう。

【保護者の方へ】

戦国時代の初期は、裏切りや言い訳をしながら戦を起こすなど、とても不安定な時代でした。そんな時代だからこそ、道徳を重んじ統制を行う必要があります。人間は弱く、またざるいものです。だからこそ、言い訳をせず道徳、信念に沿って生きてもらいたいと思います。

「戦国時代の裏切り、寝返り。太平洋戦争（第二次大戦）の特攻戦法。そして現代では宗教戦争上での自爆テロ。彼らには罪悪感はありません。現在の日本では考えられない行動ですが、これも全てに共通して教育のなせる業です。現在の日本での学力低下、青少年の風紀の乱れは教育の乱れが原因であり、先の戦争時の悲劇を繰り返さないよう、教育をしなければならぬ」と師は強く思われています。

ぬす人はよそより入ると思うかや 耳目の門に戸ざしよくせよ

盗人は他所より入ると思うかや 耳目の門に戸ざし良くせよ

「盗人」は、泥棒を意味しています。「戸ざし」とは戸締りを意味します。家を留守にする時、寝る時など、戸締りをしっかりとします。しかし、実際に注意深くしなければいけないことは、目や耳から入る情報です。戸締り時に中に入れる人、外に出る人を分けるように、情報も良い選別することが大事です。善悪の判断をして情報を選別しないととんでもないことに巻き込まれることがあります。また誘惑も頭の中から生まれるものではなく、目や耳から入ってきます。自分の誘惑を思い出してください。何か見たり聞いたりして誘われていませんか？戸締りは良くしましょう。

【保護者の方へ】

日光東照宮の彫り物として有名なものに三猿さんえんがあります。猿と余計なことをしない「ぎる」を組み合わせた物です。「見ざる」「言わざる」「聞かざる」と聞いたことがあるかと思えます。ダイエットしているのにケーキを見ると食べたくなくなるなど、誘惑は外部から起こりえるものです。有害なものを子供に見せない、聞かせない事も大事ですが、子ども自身が善悪を判断できるようになればよいと思います。

「正しい価値判断は、親の日常の言動であり、子供たちに愛情を注いで知らず知らずのうちに身につけさせてほしい」と師の願いです。

流通するとおと 貴人きじんや君きみが 物語ものがたり はじめて聞きける 顔かおもちぞよき

流通するとおと 貴人きじんや君きみが 物語ものがたり 初はじめて聞きける 顔かおももちぞよき

「流通す」とは聞き流すという事を意味しています。先生や他の人の同じような繰り返される聞き逃しそうな言葉も、常に初めて聞いた言葉のように真剣にききましようという意味です。注意深く聞いていけば思わぬ発見があるかもしれませんし、真剣に聞いていけば更に深いところまで教えてくれるでしょう。またか、と思って聞き流していませんか？同じような話でもしっかり聞きましよう。

【保護者の方へ】

上司などは同じ事を何度も語るものであり、聞き流すときは初めて聞く顔をしよう。という処世術です。この言葉を繰り返し返し考えたとき、語る者への戒めとも思いました。この歌を聴いた若者は自分の話を聞いているように聞いていないかもしれないから考えて話すようにと捉えたからです。ユーモラスで若者たちへの息抜きか、先の語る者への戒めかはわかりませんが、子供たちにはどのような人の言葉も一心に聞いてもらえるようになってもらいたいです。保護者の方には、嫌味を言わずに初めて聞く顔と態度をできるようしつけていただければと思います。

を(お)ぐるま

小車のわが悪業にひかれてや つとむる道をうしと見るらん

おぐるま

わ

あくぎょう

ひ

つとむ

みち

う

み

小車の我が悪行に引かれてや 務る道を憂しと見るらん

「小車」とは小さい荷物を運ぶ荷車を表し、自分自身を意味しています。「悪業（悪行）」とは悪い癖、怠け心を意味しています。「務る道」とは、自分の仕事を意味しています。「憂し」とは、辛い、だるいと思う事を意味しています。自分の怠け心に引きずられ、自分の行うべき仕事を辛いと思ってはいけないという意味になります。勉強や練習を辛いと思っ
ていませんか？これらは誰のものでもなく自分のためになるものです。仕事を好きになれ
ば、楽になり辛いという考えはなくなります。

【保護者の方へ】

悪業を悪行としましたが、正確には異なります。悪業とは仏教用語で「前世で悪事をしたことによる悪い報い」となっています。子供に対して前世の業を背負わせるのをためらい悪行としました。先の、心の駒の行くに任すな（りの歌）とほぼ同じ意味です。先の歌より、人の道からより自分の仕事へ関する意味合いが強くなっています。隣の芝生は青いではありませんが、人と比較するのではなく自分の職務に責任をもって努力する人に成長してもらいたいのです。

「人は遊び呆けるのが好き。しかし、その心を圧して仕事好きになろう。そう努めることで楽になる」と師よりアドバイスをいただきました。

私わたくしを捨すてて君きみにし向むかはねばうらみも起おこり 述じゅつ 懐かい もあり

私わたくしを捨すてて君きみにし向むかわねば恨うらみも起おこり 述じゅつ 懐かい もあり

「私」とは、自分自身の中しよぞくになる欲求（あーしたい、こーしたいなど）、我儘わがままを意味していいです。「君」とは、自分が所属する団体しよぞくのまとめ役を意味していいです。塾では先生が当たります。全体では、組織の一員として行動する滅私奉公の精神が必要ということですよ。それぞれが我儘を言っているのは組織は成り立ちません。我儘を思いその通りに行かないと他人を恨んだり言い訳をするものです。我儘を言って困らせてはいませんか？自分も一員だという自覚を持って行動しましょう。

【保護者の方へ】

この歌の示すところは、忠義をもって仕える事の大事さを語ったものです。現在では忠義という言葉はほとんど聞かなくなりましたが、自分が属している団体への信頼です。述懐とは、昔を懐かしみ語ることで、辞めていく事を意味していいです。辞めてしまう事は簡単です。しかし、その行動で失うものは他では得難いものでもあるのです。ちよっとした我儘も多くの人が集まれば統制はとれなくなります。一人ひとりが心がけ、家族でも協力、理解することが重要だと思えます。

「組織を正しく理解し、組織の成長のためある程度の滅私奉公は必要ではないか」と師は投げかけておりました。

学文がくもんは あしたあしたの潮しほの ひるまひるまにも なみなみのよるよるこそ なほ静おしづかなれ

学問がくもんは 朝あしたの潮しほの 干る間ひるま (昼間ひるま) にも 波なみの寄よる (夜よる) こそ なお静おしづかなれ

「朝」とは、字の通り朝を意味しています。「静かなれ」とは、怒鳴る・脅すといった事をしない人を意味します。

波が引いたときの水のように浅い知識の人に比べ、学問を深く学んでいる人は、怒鳴るなどの威圧で人を従わせるのではなく、理路整然と説得していくものです。ですから、学問を修めるのは大事だと意味になります。

自分の思うようにならないからと荒れた海のようにふるまっていますか？学を深め、すべてを包み込む雄大な海のような心持で過ごしましょう。

【保護者の方へ】

潮汐（しほ）、時間帯（朝、昼間、夜）を織り交ぜ、また潮（海水）の状態と学問の深い浅いを掛け言葉として使った面白い歌だと思えます。さらっと読み流すと「勉強は夜の静かなうちに行おう」ともなりそうです。子供の喧嘩などで暴力に走ったり、だだを捏ねて泣き叫ぶといった仕草は幼い表れであり、成長しても同じことをしているようでは情けないものです。学文は五教科のことではなく、道徳を表しています。点数主義を批判するわけではありませんが、しっかり学問を修めて大きな大人になってください。

善よきああししき 人ひとの上うえにて 身みを磨みがけ 友ともはかかががみみと なるものぞかし

善よき悪あししき 人ひとの上うえにて 身みを磨みがけ 友ともは鑑かがみと なるものぞかし

「善き悪しき」とは、道徳の観点からの良いこと悪い事を意味しています。「鑑」とは、自分自身の手本となることを意味しています。良いことも悪いことも人の動作を見て自分を律していきなさい。身近な友達はその手本をしめしてくれるではないか、という意味になります。悪い事をしている人も、自分では反面教師として学べるものがあります。友達の仕草に関心を持って見てください。自分の悪いところも見えてくるでしょう。

【保護者の方へ】

「人のふり見て我ふり直せ」この諺が全てを表しています。このいろは歌にも同じような歌がいくつも出てきます（にたるこそ、てきとなるなど）。この歌の場合は他の歌に比べどのような人とも親交を深め、良い点は自分も取り入れ、悪い点は反面教師として学べることを意味しています。まさに「和して同ぜず」を表現している歌だと思えます。時代はずっと下りますが、小説家吉川英治氏の言葉に「人生我以外皆我師」というのがあります。自分に害なす人も含め、どんな人であれ学ぶべき点があり謙虚に接しなければならぬという事です。

「（悪い）友達に引きずられないで、自分を確かに持って友達の輪を広げたいものです」と師もおっしゃっていました。

種たねとなる こころ 心の水に みづ まかせずば みち 道より外に ほか 名も流れまじ な

種たねとなる こころ 心の水に みづ 引まかせずは みち 道より外に ほか 名なも流ながれまじ

「引せず」とは、田畑に水を流すことを意味しています。行動の原動になる心の中に、常に心掛け、良い水を与え続けられ、道に外れた行動をすることもなく、不名誉な見方をされないと意味です。常に一挙手一投足に気をつけて行動していますか？常に自分の行動に考えをもって良質の実を實らせられるようにしましょう。

【保護者の方へ】

「まかせず」とひらがなになっていたので結構悩みました。任せると字を当てても意味が通ります。自分を清く正しく保ち、その心に任せていけば道から外れることはないという意味になります。一方今回の解釈では、特に心の成長に必要なのは良質の水であり、水が良質ならば実る物も良くなるという意味です。私には今回解釈したようにするのが自然かと思えました。

「本能（心の種）のままに行動しなければ、世の正道にはずれて外道の世界に家名をさらす事はない。常に理性をもって行動しよう」と師から解釈をいただきました。

礼れいするは 人ひとにするかは 人ひとをまた さぐるは 人ひとを さぐるものかは 人ひとを

礼れいするは 人ひとにするかは 人ひとをまた 探さぐるは 人ひとを 探さぐるものかは 人ひとを

「礼」とは、挨拶あいさつを意味して、心を開き真摯しんしに付き合う事を意味しています。「探る」とは、人に疑いの目をかけている状態を意味しています。相手に対して礼を尽くせば相手も同じように接し、疑いの目で接すれば相手も同じように接するということになります。常日頃からどのような相手に対して相手を尊重し接していこうという事です。

人に対してどのように接していますか？常に相手を尊重して大きな声で挨拶あいさつしましょう。

【保護者の方へ】

「礼」を挨拶と訳しましたが、挨拶を含めて相手に敬意をもって接することを意味しています。親子間でも朝「おはよう」と挨拶し、出かける時に「行ってきます」、帰宅時には「ただいま」、そして「おやすみ」など礼を行う場合は多々あります。

家庭内での礼の習慣をおろそかにすれば、必然と子供は外でも礼をしなくなります。常に相手を尊敬し、礼節を重んじる大人になってもらいたいと思います。

「社会でも挨拶すら出来ない人が多い。修徳塾だけでも大きな声で正しく挨拶をして、この「礼」を社会に広めたいものです。礼を正しく理解し実行できる人や国は立派に発展します」と師は礼の重要性を強調しておりました。

そしるにも ふたつあるべし 大方は 主人のためになるものと知れし

誹そしるにも ふたつあるべし 大方は 主人のためになるものと知れし

「誹ひる」とは、誹ひ謗ぼうの字のように相手の悪口を言う事です。また、欠点を注意することも意味します。

人に対して悪口をいうのではなく、相手の悪い点は注意して、みんなが良い方向にすすめるようにしよう、という意味です。相手を想い言葉を選べば注意になります。また、言われた方も悪口ととればそれまでですが、その言葉を良くかみしめ自身の反省の糧にしようという意味もあります。友達に対し悪口をいっていませんか？悪口ではなく、注意をしましょう。

【保護者の方へ】

この歌は、仕える者は忠節の心を持って主を諫め、また使う者はその忠言を真摯に受け止め身を修める必要があると説いています。古来より上の者が下の者の忠告をよく聞いている場合はその家は安泰し、逆に佞臣ねいしんによる甘言に耳を傾けると家は滅ぶと言われています。勧善懲悪にも通じますが、一同がお互いに意見し良い方に流れていけるように育ててもらえればと思います。

つらしとて 恨みかへすな 我れ人に 報ひ報ひて はてしなき世ぞ

辛しとて 恨み返すな 我れ人に 報い報いて 果てしなき世ぞ

「恨み返す」とは、相手を恨むことです。「報い報いて」とは、自分が相手を恨み、その事で相手が恨みと負の連鎖が起きることです。

人に傷つけられて辛いと思っただとしても、その人に対して恨みを抱き、仕返しをすれば相手も同じ様に恨む様になり、きりがなくなってしまうので、恨みをもったり仕返しをしてはならないという意味です。しかし、ただ受けて終わるだけでなく、相手と向き合い、しこりを残さないように意見を交わした方が建設的です。

いじわるへの仕返しとかしていませんか？良い事をして、感謝の輪を連ねましょう。

【保護者の方へ】

当時は人の粛清・殺生も当たり前に行われていた時代でした。ですから、先祖、親兄弟が粛清された後にも残る家族はあり、恨みの連鎖は続くものでした。当時は親族も同罪とされ殺されるのが常でしたが、中には逃げられる場合もあり復讐の連鎖は多々ありました。今では人の命まで取られることは少ないですが、恨んでも、恨まれても気持ちのいいものではないありません。その恨みの原因を糧として成長していてももらいたいです。

「正しく生きてても反対の生き方をしている人からは恨まれることがあります。正対して理解をもとめるしかありませんか」と師は感想を述べました。

ねがはずば 隔てもあらずいづはりの世にまことある 伊勢の神垣

願わずば 隔てもあらず 偽りの世にまことある 伊勢の神垣

「偽りの」とは、偽ものを意味しています。「偽りの世」というのは、人が修行するための仮の世界（この世）を意味しています。「伊勢の神垣」とは、三重県にある伊勢神宮を表し、その中で神の領域と人の領域を区別している事を意味しています。

この歌の意味は、この世で神様と人間を区別しているが、そういった分け隔てない世界が望みたいという意味です。

これは自分の物（だから人に貸さない）、あれは他人の物（だから綺麗に使わない）と区別していませんか？みんなで仲良く、協力してスムーズな生活を送りましょう。

【保護者の方へ】

この歌の意味しているところは、各大名・豪族・神社仏閣の領地を意味していて、すべての人が仲良くできるようと、全国统一を心がけるためのもののように感じました。人と接する時にはわけ隔てなく接していけるように解釈してみました。子供たちには、所有権など関係なく大事に使う、独り占めをしない。きれいにして使い終わるなどの道徳観をもってもらいたいと思います。

な いま のこ
名を今に残しおきける 人も人 心も心 何かおとらん
ひと ひと ところ ところ なに

な いま のこ
名を今に残しおきける 人も人 心も心 何か劣らん
ひと ひと ところ ところ なに おと

「名を今に残しおきける人」とは昔の人物で、現在までもその名前が伝わっている偉人を意味しています。「心」は、目標や志を持つことを意味しています。

偉人も我々も同じ人であり、同じ様に心の中に目標を持っているから自分を下げることなく同じようにできるはずだという意味になります。この歌を心に秘め、努力しましょう。才能での差は、努力・気力の差に遠く及びません。

先輩や他の道場生と比べ自分は下手だからと言いついていませんか？みんな同じ人間ですから劣ることはないので自信を持ち目標を持って努力しましょう。

【保護者の方へ】

解釈でも説明した通り、偉人と自分たちはなにも変わらないという事を意味しています。一士卒（下級武士）であろうとも常に大志をもって行動すれば偉業をなしとげる事が出来るとの事です。西郷隆永（隆盛）、大久保利通など明治維新を進めた人たちも元は薩摩（鹿児島県）の同じ町内に住む下級武士でした。子供達には、大志をもって努力し偉業を残せる人物に育ってもらえればと思います。

らく く と き
楽も苦も 時すぎぬれば 跡もなし 世に残る名を ただ思ふべし
あ と よ の こ な お も う

らく く と き す
楽も苦も 時過ぎぬれば 跡もなし 世に残る名を ただ思ふべし
あ と よ の こ な お も

「世に残る名」とは、末永く言い伝えなどで残る名前です。塾を卒業し、各学校で勇名をはせたりすることです。「跡もなし」は逆に何も残らないことです。

楽な事、苦しい事もその一時のもので。一時の感情で後に残らない感情よりも世に残る名を思い、努力を怠ったり、悪い事をしてはいけませんという意味です。一瞬の感情で動いていませんか？常に自分の正義に従って行動しましょう。

【保護者の方へ】

先の「名を今に残しおきける人」（なの歌）を受けての歌のように思えます。戦国時代、武士は、家名（家柄等）は命より重いとされた時代でもありました。「捕まって屈辱を得るぐらいならば、自害する」など今とは違う価値観でありました。

今の時代、生死にかかわる事は少ないですが、常に辛くても努力をし続けるようになってもらいたいと思います。我ながら、昔の練習も良い思い出として残っております。

「人生において苦楽はあぎなえる縄のようなもので繰り返し交互に遭遇します。特にその苦しみを克服し、年月が経って思い出すと懐かしさも感じます。あの時の苦しみに耐えて今があり、又今を生き抜くことで名を成すこともあります」と師は人生を振り返っているようでした。

昔より道ならずして おごる身の 天のせめにし あはざるはなし

昔より道ならずして 驕る身の 天の責めにし 遭わざるはなし

「道ならず」とは、そのものに対して修得していない状態を表しています。「天の責めに遭わざるはなし」とは、天罰が必ず下るという事です。

「試合で勝った」、「昇級した」と喜ぶのは良い事です、だからといって練習など手を抜いていませんか？空手の道は一生です。常にひたむきに頑張りましょう。

【保護者の方へ】

「道ならず」は道にかなっていない不正な手段ですが、後の「道にただ（みの歌）」の道と同じ意味にして、空手道に対しての驕りとしてみました。

「生兵法は怪我の元」という言葉があります。人間ある程度の成功を修めると気が緩みがちになります。しかし、気を抜いたときが一番の失敗であったことは歴史を見てみればわかる事です。

私たち指導員にしても空手道を極めているわけではありません。日々の練習の合間に独自に空手を考え、どのようにしたら上手くなるか、強くなれるか、試合に勝てるようになるかを探究しています。塾生が良い成績を残したら褒めてあげてください。しかしその点におごり高ぶり、練習の手を抜いたりはしないようにしてもらえればと思います。

「私は額に汗しない金品は不要のもの」と心に決め、口にしています。道を踏み外してまでの富は入っても「天」から痛みを伴って召し上げられるものです」と師の心構えです。

憂^うかりける 今^{いま}の身^みこそは 先^{さき}の世^よとおもへばいまぞ 後^{のち}の世^よならん

憂^うかりける 今^{いま}の身^みこそは 先^{さき}の世^よと思^{おも}えば今^{いま}ぞ 後^{のち}の世^よならん

「憂かりける」とは、辛いと思う事です。「先の世」と「後の世」は過去と未来を表して
ます。今が苦しいのは過去に起こした怠^{なま}け心などが原因であり、将来つらい思いをしない
ように精一杯努力しようという意味になります。
試合などで良い結果をだせず悩んだりしていませんか？今できることは、未来のために努
力することです。今こそ力一杯努力しましょう。

【保護者の方へ】

仏教の因果応報いんがおうほうを表しています。実際に今が苦しいのは前世の報いでしょうがない、
来世を思い逆境にも負けず善行をしようという意味です。しかし前世の報いを今の子供に
背負わせるのは忍びなく、またこの現状はどうしようもないというのは建設的でないため、
このように解釈いたしました。因果応報は難しい概念ではありますが、うまく伝えていけ
ればと思います。

亥いにふして 寅とらにはお起くと 卯うづゆにみ身をいたづらに あらせじがため

亥いにふして 寅とらにはお起くと 夕露ゆうづゆの 身みをいたづらに あらせじがため

「亥に伏す」とは、夜一〇時に寝る事を表しています。「寅に起く」とは朝五時に起きる事を表しています。この間の時間帯は明日への休息時間です。太陽と共に人は力を発揮できるようになっています。「身をいたづらにあらす」とは無駄に過ごす事を意味しています。早寝、早起きを習慣付けておかないと、若い元気な体を無駄使いせず、夜はゆっくり休み、日中元気に活動しようという意味になります。夜更かししていませんか? 「早起きは三文の得」という言葉もあります。早寝早起きを心がけましょう。

【保護者の方へ】

亥や寅とは、昔の時間表現で、それぞれ十二支に二時間程度がわりふられています。夕露とは、命のはかなさを(特に若者の時間・青春)表現しています。当時から夜更かしは博打などの規律が乱れやすかったため、多くの家訓に残されています。今の世では不夜城のように夜でも昼と同じように生活できますが、早寝早起きの習慣をつけてもらえればと思います。

「早寝早起きは良いことだが、勉強というある目的の為の努力として、寝食を忘る行為は大いに礼賛する価値があります。深夜テレビや夜遊びはもってのほか」との言葉をいただきました。

のがるまじ ところ 所をかねて おもい 思ひきれ とき 時に至りて いた 涼しかるべし すず

逃のがるまじ ところ 所をかねて おも 思いきれ とき 時に至りて すず 涼しかるべし

「のがるまじ」は、避けては通れない困難なことを表しています。「涼しかるべし」は、心が涼しくなる（満足感）ことを表しています。逃れられないと思える時は、逆に思いつきり行うことで満足感が得られます。嫌なことを後回しにしたりしていませんか？苦しいのは今の一瞬です。頑張りましょう。

【保護者の方へ】

関ヶ原の合戦時、負けた西軍に属していた島津家は撤退を行います。この時の方法は通常では考えられないものでした。敵本陣に対して正面を横切りどうどうと退却していきました。追いかけた東軍も被害を受けるほど立派に退却したそうです。

「背水の陣（退路を自ら断ち、勇戦するように仕向ける戦術）」などのように手がふさがってしまった時、思い切って行動するのも成功に導かれることもあります。

歌とは直接関係ありませんが、負けん気、チャレンジ精神は常に持ってもらいたいと思います。

「鹿児島では、兄ちゃんが石垣の上に小さい子供を立たせ『飛びかい、泣こかい、泣こよか、ひっ飛べ（飛ぶか泣くか、泣くなら飛んでしまえ）』とはやして、その内思い切って飛び降りさせたものです。こんな気風が薩摩にはありました」と師が語っていました。

おも おえ たがう
思ほへず 違ふものなり 身の上の 欲をはなれて 義を守れひと

おも たが
思おえず 違うものなり 身の上の 欲をはなれて 義を守れ人

「身の上の」と「人」は、自分の立場を表しています。「義」とは、人の守るべき姿を現しています。自分の現状と、欲とはかけ離れた事が多いから、見栄をはらずに自分に合ったものを選ぶようにという意味になります。高価なものなどほっしていませんか？自分にあったものを選びましょう。

【保護者の方へ】

金品などにつられて悪さをするなど良くあることです。この歌では賄賂などの誘惑に負けないようにという意味がありますが、次のような欲への戒めも紹介します。

世に名を残している武将には似たような逸話が多々あります。

小者（身分の低いもの）が高級な武具や馬を買い求めてはならない。豪華な服装をしてはならない。といったものです。

名刀を持った一人が、安物をもった兵士百人には勝てないから。

良い手柄を立てるチャンスを馬にこだわる事で逃してしまわぬように。

同僚が高級な服装をしていると、心狭い思いをしないようにと説明しています。

ブランドものを借金してまでも購入するなど身分不相応なことをしないように伝えて下さい。

くる
苦しくと みち すぐ道を行け い 九曲折の つづらおり 末は鞍馬の すえ さかさまの くらま 世ぞ よ

くる
苦しくと すぐみち すぐ道を行け い 九曲折の つづらおり 末は鞍馬の すえ さかさまの くらま 世ぞ よ

「直ぐ道」とは、人の道に沿った行動を指します。「鞍馬の九曲折」とは、京都の鞍馬山にある折れ曲がった坂道を表しています。苦しいからといって、道をそれて（悪い事をして）はいけない。その先にはさらに曲がりくねった世界になり、思ったのは全然違う結果になってしまうという意味になります。苦しいからと言って悪いことなどしていませんか？一度反れたら修正は難しいですよ。

【保護者の方へ】

真っ直ぐに對して極端に曲がった道を対照的に比較されている歌です。一度道を外してしまふと、なかなかまっとうに戻る事は難しくなります。また、曲がりくねった道は、目的地までの距離を何倍にも延びてしまいます。まがった事とに手を染めず、子供達にはまっすぐ素直に育ててもらいたいと思います。

やはらぐと怒るをいはば弓と筆鳥にふたつのつばさを知れ

和らぐと怒るをいわば弓と筆鳥にふたつの翼とを知れ

「和らぐ」とは、優しく接する事です。「怒る」は逆に荒々しい態度です。「弓と筆」は文武
両道を表しています。「鳥に二つの翼」とは、「文武両道」同様二つ揃って初めて有効にな
ることをあらわしています。鳥はひとつの翼では飛べないのと同じです。人を教育するに
は、普段はやさしく、時に厳しくすることが必要で、どちらかだけでは不十分だと意味し
ています。

人とうまく接していますか？人と、特に年下の人に接する時は、優しさだけでも、もちろ
ん厳しさだけでもいけません。

【保護者の方へ】

「飴と鞭」ではありませんが、人を使うときには甘やかす（和らぐ）だけでも、恐怖（怒
る）だけでも上手いきません。褒めるときは褒め、叱るときは厳しくといった事を意味
しています。特にこの歌が創られた時期は戦国時代ですから、強い武士を育てるのが狙い
となっています。ですから普段から言われる文武両道、そして当り前の鳥の羽翼にたとえ
てさとしています。ご家庭でも、厳しさと優しさを織り交ぜ、芯の通った人に育ててもら
えればと思います。

まんのう いっしん こと みの たの しあんかんにん
万能も 一心とあり 事ふるに 身ばし頼むな 思案堪忍

まんのう いっしん ことふ みの たの しあんかんにん
万能も 一心とあり 事旧るに 身ばし頼むな 思案堪忍

「万能一心」とは、どんなに強くても、正しい心を持っていなければいけないという意味です。「思案堪忍」とは、よく考えて相手を許す事を意味しています。自分がどんなに強くても、そのことに慢心して心が欠けてはいけないという意味です。強さばかりに目が行っていませんか？古くから、心がけが大事と言われているので、強さにかまけて心がおろそかにならないようにしましょう。

【保護者の方へ】

「万能一心」は、「万能足りて、一心に足らず」（竹馬抄）より生まれた言葉です。どんなに多才な能力を持っていたとしても、心が欠けている残念な様子を表しています。先の言葉はその逆を意味して、才能に恵まれても真剣に行わなければ成就しないことを意味しています。どんなに強くても、力を間違った方向に使わないように、心技体のバランスのとれた大人に育てていきたいと思っています。

「空手を見ても、だんだん実力が付いて県大会でも上位入賞する様になると、自分の才能におぼれて、練習をおろそかにしたり自分勝手な事をして結局は脱落していく人を多く見してきました。そのようなことにならないように、自分が自分にブレイキをかけることが大事です。自分でブレイキをかけられない人や年齢の人には親が教えることが義務でしょう」と師も過去を振り返っておりました。

賢不肖 けんふしょう もちひ捨つると もちす 言ふ人も いす 必ずならば い 殊勝なるべし うひと かなら かなら しゅしょう

賢不肖 けんふしょう 用い捨つると もちす 言う人も い 必ずならば い 殊勝なるべし ひと かなら しゅしょう

「賢不肖」とはできる人、できない人を意味しています。「用い捨てる」とは仕事を任せる任せないという意味です。「殊勝」とは、立派な行いということなのです。友達と役割を分担するときには仲のよしあしで決めるのではなく、得意不得意で決めるという意味です。仲よしにひいきにしていますか？分担はしっかりやりましょう。

【保護者の方へ】

適材適所とは、組織を運営していく上では最も必要なことと言われています。しかし、実際には、人との利害、相性（好き嫌い）が左右している場合が多くあります。戦国時代の各家訓を調べてみるとやはり適材適所を謳っているものが多くありますが、実際には家柄などで選ばれているケースが多かったようです。

人には得手不得手があります。本人の考えとは別に備わっているものもあると思います。自らは長所を伸ばし、人の起用には公平を持てるようになりましょう。

「まずは子供の才能を見抜くことが大事でしょうが、またこれも難しい。全世界でも幼くして才能を見いだされ英才教育を施され大成した人が何人いるでしょうか？」

えこひいき 依怙鼻肩をしないで中立で正しく人を観抜く事は至難の業ですが、理想としては立派だし日新公ほどの方だから云える事です」と師は感心してました。

無勢ぶぜいとして 敵てきをあなどる ことなかれ 多勢たぜいを見ても 恐おそるべからず

無勢ぶぜいとして 敵てきを侮あなどることなかれ 多勢たぜいを見ても 恐おそるべからず

「無勢」とは、弱々しく見えたり、体が小さかったりを表しています。「多勢」は逆に強そうに見えたりする事です。相手を見て弱そうだからと油断したり、強そうだからと言って勝てないとあきらめて手を抜いてはいけないという意味です。試合で相手の容姿や過去の戦歴に惑わされていませんか？虎は兎を狩るにも全力を尽くすといえます。いつでも自分のベストを尽くしましょう。

【保護者の方へ】

戦国時代、戦の多くは兵力の多い少ないによって勝負が決していましたが、中にはその逆もありました。敵の多さに負けしてしまったのは勝てる戦にも勝てないでしょうし、こちらが優勢でも、油断したために逆に負けてしまう事があります。

試合などで体躯の差で心構えを変えるのではなく常にベストを尽くせるようになってもらいたいと思います。

「別（のの歌）でも解説されていますが、島津軍は関ヶ原の戦いで党軍に加勢するつもりでしたが、ひよんな事から西軍につかざるを得なくなりました。周囲で西軍から東軍への寝返りが多い中決着がつく寸前まで堂々と陣を張っていました。退却時は敵に背を向けるのではなく敵中突破を決行して落ち延びたのは有名です。東軍はあまりの意気にのまれ道をあげたそうです」と師は歴史を語っていました。

心こころこそ 軍いくさする身みの 命いのちなれ そろゆれば生きい 揃そろはねば死しす

心こころこそ 軍いくさする身みの 命いのちなれ 揃そろゆれば生きい 揃そろはねば死しす

「心」とは、この歌の場合目標をさします。この歌は生死に直接さようしているので「生き」「死す」の言葉を使っていますが、現代では勝負の勝ち負けとれます。試合や審査などは各個人の努力だけではなく、親兄弟の応援、指導者の指導がすべて揃ったの結果になります。結果は自分ひとりのおかげと思っていまませんか？ご両親に感謝しましょう。

【保護者の方へ】

先の多勢無勢の話の続きになりますが、無勢でも多勢に勝つときは条件があります。将の意志の強さ、人馬の力強さが合わさり、将士人馬共に一致団結した時に起きる奇跡です。この歌は特に一軍の将に対した歌で、常日頃から部下一人ひとりに目をかけておき、いざというときには命をかけて手足となって働いてもらうための心がけだという歌です。保護者の皆様は試合などには興味関心をもっていただき、お子様の節目ふしめでは応援してほしいと思います。

えこう
回向には 我と人とを 隔つなよ 看経はよし してもせずとも
われ ひと へだ かんきん

えこう
回向には 我と人とを 隔つなよ 看経はよし してもせずとも
われ ひと へだ かんきん

「回公」とは、人として良い事を行った徳を還元することです。「看経」とは、経典などを読み徳を積む事です。この歌は、経典を積極的に読む必要はないが、その徳を自分のためだけに積むのではなく、この世もあの世も全ての人に対して良い世界になるようにしましようにという意味になります。

自分だけの世界ではありません。親兄弟先祖をはじめ友達など全ての人のために徳を積みましょう。

【保護者の方へ】

一読すると、自分の身内も他の家も、そして敵などであっても死者を弔うのに差別をしてはいけなさと解釈できそうです。しかし日新公自身が禅宗の信者であることを考え、書物を読みあさってみると意味が少し変わってくるかと思いました。

日新公は弔いの意味で歌われるのかもしれませんが、このような解釈はいかがでしょう
か？

「戦が起これば敵味方に多くの死者が出ます。戦の終わった後に敵味方の区別なく亡骸を集めて弔っていました。人間争いあっても決着がついたらお互いに情けを交わそう」と師は言われています。

てき
敵となる ひと 人こそはわが 師匠ぞと おもひかへして 身をもたしなめ

てき
敵となる ひと 人こそはわが 師匠ぞと 思い返して 身をも窘め

「敵」とは、争いの相手だけではなく、自分に対して危害を加えている人や自分と考え方がことなり言い争いをする人も指します。また好敵手を指します。「身をも窘め」は、自分の行いを反省し生きていく事を意味しています。この歌の意味は、自分に対して危害を加える人も、他の人に同じことをしないように気をつけるために活用する、自分とは違う価値観も単なる否定ではなく耳を傾ける。そしてライバルこそが極上の自分を高めてくれる人ということ。「和して同ぜず」にもつながります。

ライバルとの勝ち負けだけに目が行っていませんか？ライバルとは自分と一番近い師匠です。その力を吸収しましょう。

【保護者の方へ】

他の歌（にたるこそ、よきあしき）にもありますが、この歌は特にライバルについて語っています。一般的にライバルといえれば力が均衡している状態を指します。良いほうに転べば、お互いに切磋琢磨しともに成長して行けますが、悪くなると恨みごとから恨み節になり足を引っ張り合って終わってしまいます。また思想などもお互いに語るまでは知らないことかもしれませんし、感化されて良くなることも多々あります。反面教師的な面もあります。ライバルとの共存共栄を図ってほしいと思います。

あきらけき め 目も呉竹の め 目も呉竹の よ この世より まよわ 迷はばいかに のち 後のやみぢは

あき 明らけき め 目も呉竹の よ この世より まよ 迷わばいかに のち 後の閻路は やみぢ

「明らけき」は、はっきりとしている状態を意味しています。「閻路」とは心の迷いを意味しています。はっきり見えている世の中で迷っては、本当に迷った時にどうしようもないから、普段からよくよ悩まないようにしようという意味です。小さいことで悩んだりしていませんか？強い心を持って、素早く的確な判断を行えるようにしましょう。

【保護者の方へ】

「閻路」は禅の言葉で心の葛藤を意味していますが、「後の閻路」は死後の世界を表しています。光のある現世でさえ迷ってしまっっては、死後の閻の世界で道を迷わないでいられようかという生き方を表した歌です。迷うには、人の道、心の迷いなど様々な意味が隠れているように思えます。いずれにしても心にまっすぐな一本の芯が通るように育ててもらいたいです。

「この世は淡竹（呉竹）の様に実直に暮しなさい。人はいつも迷って悪いことをしている。そしてあの世の閻路にさしかかると前世の悪さがあの世の路の進路の妨げとなって成仏できなさい」と師は語っています。

酒も水 流れも酒と なるぞかし ただ情けあれ 君がことの葉

酒も水 流れも酒と なるぞかし ただ情けあれ 君が言の葉

「酒」とは、ここでは価値のある水を意味しています。「流れ」とは、水を表現しています。物の価値は実際の価値と同じとは限りません。貰ったものに価値をつけるには、その人から好意的に思われていることが重要です。常に友達とは仲良くしていようという意味です。少し話は変わりますが、毎月発行されている塾報。これも読まなければ唯の紙、きちんと読んで自分のものにできれば最良の教科書ともなりえます。仲良くしていますか？好意的に思われるように接しましょう。

【保護者の方へ】

子供向けに説明するのは難しいものでした。戦場などで物資が不足した時に将たる者が心がける事です。常日頃のコミュニケーションは当然ながら、下賜するさいの言葉一つで物の価値が変わる事を意識しなければならぬという事です。

子供が準優勝のメダルを獲ったとしても親の一言で次への励みになるか、足枷になるかが変わります。愛情を込めて、迎えてあげられることを切に願います。

「人の上に立つ者の心の在り方示しています。その人の心遣い、言葉使いひとつで部下は喜び・悲しみを感じます。上に立つ者だけの問題と固定しないで我々は普遍性を与えたいです。」と師は拡張されました。

聞くことも 又見ることも 心がら 皆まよひなり みな悟りなり

聞くことも 又見ることも 心がら 皆迷いなり 皆悟りなり

「心がら」とは、物事の捉え方を意味しています。「迷い」とは心が重くなることを「悟り」とは物事の本質がわかり、心が楽になる事を意味しています。どの様なことに対しても、自分の心・考え方一つで苦しくもなり、楽になる事ができる。常に悟りを開けるように心がけようという意味です。何かを見てねたんだり、悩んだりしていませんか？悟れるように心にゆとりを持ちましよう。

【保護者の方へ】

別の歌（あきらけき）にもありますが、迷いは人の道を誤らせませす。迷いと悟りは紙一重です。森羅万象全ての事から悟りは開かれます。それはふとした瞬間に見えた光景かもしれませんし、なんとなく聞こえた音かもしれません。ただの風景、雑音で終わってしまってはこれで終わりです。常に意識しながら生活を送って行きましよう。「満天の月にも、その下に雲（迷い）がかかっていると、この世は悟りに一歩近づき、心の楽しみを味わうのでしよう」と師はいつております。

弓を得て 失うことも 大将の 心一つの 手をばはなれず

ゆみ え うしな たいしよう こころひと て
ゆみ え うしな たいしよう こころひと て
弓を得て 失うことも 大将の 心一つの 手をば離れず

「弓」とは、戦争を行うための武器ですが、ここでは自分の仲間を意味しています。「手を離れず」は仲間から外れる事を意味しています。強力な、頼りになる仲間を得ることも、また仲間が去っていくのも自分の心構えにあるという意味です。常に良い友達と仲良くしていますか？良い友達が去らないように気を使いましょう。

【保護者の方へ】

「弓」を仲間と訳しましたが、実際には部下を意味しています。優秀な部下を得て、活躍させ続けるには上司の立ち振る舞いが重要という事を意味しています。部下の手柄は自分の手柄と考えたなら、その後人は付いてきません。その人のために働きたいと思わせることができれば、非常に良い関係になるでしょう。人的魅力を十分に引き出し、それぞれがよいパートナーシップを築けるよう、仕向けて下さい。

めぐりては わ み 我が身にこそは ことえ 事へけれ せんぞ 先祖のまつり ちゆうこう 忠孝の道 みち

めぐ 巡りては わ み 我が身にこそは こと 事えけれ せんぞ 先祖の祀り ちゆうこう 忠孝の道 みち

「巡りては我が身」とは、時が経って自分も同じようになることを意味しています。「先祖の祀り」とは、お墓参りや、法要、仏壇への念仏を意味しています。「忠孝」とは、親・先輩に感謝して、喜んでもらえる様行いをする事です。今自分が行っている事は代が変わっていけば自分も同じようにしてもらえるので、今から親、先祖に対して敬意をもちましようという事です。

親孝行していますか？いずれは自分が親になります。日頃から孝行心を持ちましよう。

【保護者の方へ】

「忠孝」と一括りにしていますが、「国に忠、親に孝」（儒教）という言葉があります。子供は親を見て育ちます。大人が良い模範を見せ積極的に孝行、先祖を祀っていけば子供は教えなくても自然とできるようになっていきます。核家族化が進んでいますが、そういった時代だからこそ孝行心や先祖を敬う必要があるように思えます。

「家庭内で孝行な子供が成長して国を大事にします。そして国が繁栄します。故に繁栄しない国には家族の倖はありようがありません。今の日本は有事の際アメリカの青年に護ってもらう状態です。護ってもらう日本の青年の学力は世界下位。体力気力はないでいいのでしょうか。国旗すら知らない子供がいて、国歌も歌わない国が日本以外にどこにあるのでしょうか」と師は心配しています。

道みちにただ 身みをば捨すてむと 思おもひとれ かならず天てんの たすけあるべし

道みちにただ 身みをば捨すてんと 思おもいとれ 必ず天てんの 助たすけあるべし

しょうじん

「道に身を捨てる」とは、ひとつの物事に対して、脇目をふらず精進し全身全霊をかける事です。

例えば空手に対して、他の色々なものを捨てて集中する決心をすれば、困った時に必ず天の助けが得られるという意味です。どのような結果であれ努力は成果として得ることができします。昇級・昇段審査や試合の結果、ふとした瞬間の条件反射など様々です。自分の信念に一心に励んでいますか？一心に励んでいれば必ず天が助けてくれます。

【保護者の方へ】

道を極めることは大変な事です。しかし、その道を極めるためにする努力は決して無駄にはなりません。その努力はその道で大成するかもしれないし、また違う分野でその努力や経験が役に立つことも多々あります。子供達にはネバーギブアップ（諦めない）の精神を培うよう指導してあげればと思います。

舌だにも 齒のこはきをば 知るものを 人は心の なからましやは

舌だにも 齒の強きをば 知るものを 人は心の 中らましやは

「強き」とは固い事を表しています。「ましやは」とは、ましてできないはずがないということ表現しています。

舌でさえ、齒が固いのを分っているのだから、人は相手の心の中をわからないはずがない。そのため、努力をしなければならぬという意味です。相手の気持ちを考えていますか？舌よりも下にならないようにしましょう。

【保護者の方へ】

舌と齒の関係を、自分と他人に置き換えた面白い歌です。相手の気持ちを察するようにと、というのが簡単な解釈ですが、次のようにも考えました。

齒を食いしげると、舌はその硬さに勝てず決して外に出ない。人は表に出さない心の内があることを知る必要があります、表面だけでなく、相手の真情を見極める事が重要である。といった解釈はいかがでしょうか？

「龍には逆鱗と呼ばれる鱗があります。大人しい龍もここを触られると怒りだして手に負えなくなるそうです（逆鱗に触れる）。人間関係でも相手の逆鱗には触れないでお付き合いできるように気を使うようにしたいです」と師はアドバイスをいただきました。

酔(え) へる世よをさましもやらで さかづきさかづきに 無明むみようの酒さけを かさぬるうは憂うし

酔よえる世よを 醒さましもやらで 杯さかずきに 無明むみようの酒さけを 重かさねるは憂うし

「酔える」とは、お酒を呑み気分がよい状態です。「無明の酒」とは、仏教の言葉で欲におぼれている状態をさします。欲が欲を生み苦しんでいる状態は苦しいから、考え方を変えて楽になろうという意味です。なやんでいませんか？欲をうまく利用して良い励みにしましょう。

【保護者の方へ】

洒落しゃっ気けを入れた別の解釈として、「酔っているから味も分からず、安い無銘の酒を飲み続けているのは愚かである」というのも読み取れました。ただ酔うのではなく、良い酒の良よい味あじを堪能たんのうする心のゆとりを持つという意味です。この解釈もいかがでしょうか。

「無明の酒」とは、本来仏教用語で煩惱ぼんごうを酒で酔った状態をたとえての言葉です。こどもに対して酔いの状態を説明するのは難しいですが、煩惱ぼんごうに対してひとつひとつ真摯しんしに向き合い解消かいしょうできるよう見守り、助けてあげてください。

「世よの煩わづわしさから逃にげる為ために口くちにする酒さけは最初さいしょはいいものです。しかし一合いちがっで良よかったものが二合にがっになり、晩酌ばんしやくで良よかったものが昼間ひるまから飲のむ様ようになり、その内体うちたいを壊こわす人がなると多いことか。こんなバカなスパイラルスパイラルに吞のまれる前に初期しんきに心構こころかまえを変かえなければなりません」と師しは忠告ちゅうこしています。

ひとり身をみ あはれと思へわ 物ごとにおもえ 民にはゆるすもの ころあるべしたみ

ひとり身をみ 哀れと思え物ごとにあわ 民には緩すおも 心あるべしもの

「哀れと思え」とは、その人に気を配り、仲間になるよう手を差し伸べることです。「民」とは、本来の意味から少しずれますが後輩を意味します。入りたての人は一人で何も無い状態が入ってくるので、優しい気持ちで仲間として迎え入れ、上手にできなかったとしても笑ったりせずともに練習しようという意味になります。後輩や年下の者が上手にできないことを笑っていませんか？だれでも最初はできないものです。一緒になって上達できるように心がけましょう。

【保護者の方へ】

「独り身」とは、死別などして一人で暮らしている人を指します。この歌では、民をその中でも特に老齡の独り者に対してです。古代中国には次の意味の言葉があります。「治める者は民の父母として国を治め、慈愛の心をもって守る義務がある」。

今回の解釈では、特に新しい人が入ってきたときに慈しむことになりましたがいかがでしょうか？

「今の介護に通ずる事ではないでしょうか。老後、又は戦で夫子供を失って一人で住んでいる人は心が寂しいものだから、その様な民には色々手を打って情けをかけなさいという意味です。日新公はこの時代に老人福祉を考えていたとはさすが」と師は感心しています。

もろもろの 国や所の 政道は 人に先づよく 教へ習はせ

諸々の 国や所の 政道は 人に先づよく 教え習わせ

「国や所の政道」とは、法律や約束事を意味しています。

法律や約束は一、二度説明して実行するのではなく、みんなが納得するまで説明してから実行するようにしようという意味です。物を教えているときに短気になっていませんか？特に物を教える時も相手の立場（年齢など）を考えて短気にならないようにしましょう。

【保護者の方へ】

上杉鷹山（江戸中期の大名）の言葉に「してみせて 言って聞かせて させてみる」とい

やまもと いそろく

うのがあります。また、山本五十六（太平洋戦争中の軍人）も「やってみせ 言って聞かせて させて見せ ほめてやらねば 人は動かじ（略）」と似たような言葉を残しています。規則や法律を無暗やたらに守れと上から目線ではないのではなく、自ら率先して繰り返し手本を見せ、納得させ守らせるようにしなければ意味はないということです。子供達に対してあれこれ注意をしても理解できない事があります。短気を起して叩くなどする事もあると思います。我が指導者も率先して子供たちの手本になるようにしていく所存です。

善ぜに移うつり 過よぎれるをば 改あらためよ 義ぎ不ふ義ぎは生うまれ つかぬものなり

善ぜに移うつり 過よぎれるをば 改あらためよ 義ぎ不ふ義ぎは生うまれ つかぬものなり

「過ぎれる」とは時間が経つという事です。「改めよ」は考え方を変える事です。「義不義」は人としての評価、善人か悪人かという事です。昔を悔い改め、努力している人がいれば、昔悪い事をしたからといって、いつまでも悪人のレッテルを貼ってはいけないという事です。昔の事を根に持っていますか？人は変われます。

【保護者の方へ】

前述の「咎ありて」（とのうた）と同じような意味になります。性善説（人は生まれたときは完全な善であり、その後の生活で悪い事を覚え罪を重ねてしまう）、性悪説（人は動物と同じであり、生まれたときは無知であり悪いことも平気で行えるが、徐々に善行を学習し良い人物になる）などありますが、いずれにせよ人は変われる生物です。人を端的に見ず、良い方へ導いてあげてください。

「悪事をした人が後年善行を積むという事はよく聞く話です。改心した後は過去をいいつづつたり、批判してはいけないということです。生まれつきの悪人はいないんだ」と師は語っています。

少しき^{すこ}を 足^たれりとも知^しれ 満^みちぬれば 月^{つき}もほどなく 十六夜^{いざよい}のそら

少しき^{すこ}を 足^たれりとも知^しれ 満^みちぬれば 月^{つき}もほどなく 十六夜^{いざよい}の空^{そら}

「少しきを足れりとも知れ」とは、少し少ない状態で満足しなさいという意味です。「十六夜の空」とは、月が少し欠けた状態を表現しています。月は満月になったとしても直ぐにかけ始めてしまうものだから、少し少ない状態で満足しなさいという意味になります。欲に駆られて目一杯欲していませんか？少し少ない事で次への満足に備えましょう。

【保護者の方へ】

旧暦（太陰暦）では、月の満ち欠けで日付を決めていました。新月を一日、満月を一五日としていました。十六夜とは満月の翌日を表し、少し月が欠けた状態になります。

武田信玄（戦国時代の大名）の言葉に「およそ軍勝五分をもって上となし、七分をもって中となし、十分をもって下と為す。その故は五分は励^{はげみ}を生じ七分は怠^{なまけ}を生じ十分は驕^{おごり}を生じるが故」あり、また腹八分などの言葉も示すとおり、限度まで行かない方が良いでしょう。しかし、指導者としては限界まで頑張ってもらいたい良い成績を残してもらいたいのです。欲と努力とは別と解釈してください。

じっしんこう

日新公いろは歌

実践編

歴史背景

忠良は父の死後、海蔵院の頼増和尚の元で五歳から一五歳まで教育を受ける。永正三年（1506）、忠良は元服し伊作島津家を継ぐ。忠良は伊作・亀丸城より田布施・亀ヶ城に入城。二一歳で阿多・田布施・高橋・伊作を領す。禅の修行に精進し学門を修め、人道を守り領民には善政を施したのでその徳は領内外に高まった。大永六年（1526）忠良は国政委任を引き受けるとともに、自身の長子虎寿丸（島津貴久）を忠兼の養嗣子として送り込む。忠兼は元服した貴久に守護職を譲り忠良にその後見を依頼。忠兼自らは出家し伊作に隠居した。忠良はこれを見届けると三三歳で剃髪、「愚谷軒日新斎」と号し貴久の補佐を勤め三州統一に邁進することとなる。琉球を通じた対明貿易や、鉄砲の大量購入、家臣団の育成に励んだ。城下町を整備、養蚕などの産業を興し多くの仁政を敷いた。その後の薩摩独特の士風と文化の基盤を築いた。いろは歌は薩摩藩士の郷中教育の規範となり現代にも大きな影響を与えている。

永禄一一年（1568）、七七歳で加世田にて死去。法名は梅岳常潤在家菩薩（現在この名を継ぎ加世田常潤という農業高校があります）。深く禅宗（曹洞宗）に帰依し、永禄七年（1564）、加世田武田の地に保泉寺を再建。忠良の死後、七世住持の梅安和尚が寺号を「日新寺」と改めた。日新寺は明治二年（1869）の廃仏毀釈により破壊され廃寺となったが、その四年後の明治六年（1873）に同地に竹田神社として再興され、忠良は祭神として祀られる。

用語

君・主人（主）

しゅじん あるじ

組織や団体のまとめ役を指します。「君」は特に大きな組織の場合を指し、「主人」は家庭など比較的小さな組織の場合によく使われます。

友

その中で特に人生の良き相棒（パートナー）になる人を指します。一生のうちで真の友ができれば最高などと言われますが、中々出会えるものではないと思っています。友達でもありますが、この場合遊び仲間の意味合いが強くなります。

名・家

名とは個人の名声、家は家族の評判になります。昔は仮に自分が死んだとしても立派な生きざま死にざまをすれば残った家族はその恩恵に与ることができました。ですから個人の命よりも重視させることも書かれています。今でも汚名返上・名誉挽回と家よりも個人ですが価値があります。

道

人としての守らなければならないことを指します。また狭義として空手などの心得を指します。

徳と五常など

「徳」とは、人として生きていく上で大切な考え方を表しています。次に説明される五常など細かい考え方をまとめたものです。

「五常」とは、儒教で徳の中でもさらに大切な考え方を五個選び出したものです。

「仁」は全ての人へ対して思いやる心。

「義」は正しい行いを守ること。

「礼」人間関係をスムーズに行うためにする約束事。マナー。挨拶など。

「智」事の善悪を判断できること。

「信」神仏・先祖などを崇め、人を信じること。

その他に次のようなものもあります。

「忠」組織などに対して、共同意識を持って参加すること。

「孝」特に親に対して、愛情を持って接し、心配などかけないこと。

「悌」年上の人に素直に従い、年下の人に愛情で接し、上下の関係を潤滑にすること。

漢字一字で示され、なんとなくはわかりそうな事ですが、一つひとつの意味をよく考え、実践してください。

あとがき

いかがでしたでしょうか。筆者も歌を何度も読み返し、書籍を読み、たどり着いた結果です。しかし、これがすべて、そして正しいという事ではありません。この本を読んだ個人が新たに考え、後世に伝えていってもらえればと思います。

最後に空手道二十訓を掲載いたしました。ちいさい子どもは暗唱を目指し、中学生ぐらいまでには意味も理解してもらえれば幸いです。そして最後には各自で読み、考えてもらいたいと思います。

この企画をして一年。武道を通して知り得たこと、修徳塾に通い学べたこと、その後の就職や起業した時など多くの人に出会い援けられ、更に多くの事を感じ学びました。最後になりましたが、青木先生をはじめとして全ての方々に深く感謝いたします。

平成二二年春

参考文献

次の書籍をはじめとして、多くの書籍より学ばせていただきました。文末ではありますが、掲載をもって御礼を申し上げます。

いろは歌

メールマガジン「自己変革学習西郷・大久保らのエネルギーの源泉『島津いろは歌』
写真旅行記 (<http://washimo-web.jp/Trip/IrohahUta/Irohauta.htm>)

島津義弘.com (<http://www.shimazu-yoshihiro.com/shimazu/shimazu-irohauta.html>)

来歴・人物像など

Wikipedia (<http://ja.wikipedia.org>)

用語・単語など

旺文社 古語辞典 (旺文社・1965)

各社故事・ことわざ辞典

解釈の参考にした書籍

名将に学ぶ 人材編・行動編 (武藤誠・三笠書房 1986)

上杉鷹山の経営学 (童門冬二・PHP文庫 1990)

上杉鷹山と細井平洲 (童門冬二・PHP文庫 1997)

上杉鷹山の指導力 (高野澄・PHP文庫 1998)

名将言行録・甲子夜話・早雲寺殿廿一箇条・甲陽軍鑑・信長公記・太閤記

孫子・菜根譚・史記・中国故事

他啓蒙書、歴史書籍、歴史雑誌 (歴史と旅、歴史街道) など多数

修徳塾道歌・心得と日新公いろは歌

修めよ徳おき 徳 練れよひたすらからてみち 空手道どうしつど 同士集うまなびや うれし塾しゅうとくじゆく

修徳塾しゅうとくじゆく 青木 幹あおき かん

空手とはからて 人に打たれずひと う 人打たずひとう 事の無きをこと な 基とするなりもと

神道自然流しんどうじねんりゆう 小西 康裕こにし やすひろ

一、和顔愛語ひとつ わがんあいご

一、和して同ぜずひとつ わ どう

一、勸善懲悪ひとつ かんぜんちようあく

い：いにしへの道え みちを聞ききても唱となえへてもわが行おこないひにせずいばかひなし

ろ：楼ろ うえの上もはにはにゆうふの小屋を(お)やも住すむ人の心ひとにこそはたかこころきいやしき

は：はかなくも明日あすの命いのちをたのむまじは(わ)かな今日けふ(きよう)も今日けふ(きよう)もと学まなびをばせで

に：似にたるこそ友ともとしよけれ交まじは(わ)らばわれにひとます人ひとおとなしき人ひと

ほ：ほとけ神かみ他たにまひとしまさず人ひとよりも心こころに恥はぢよ天地てんちよく知しる

へ：下手へたぞとて我われとゆるすな稽古けいこだにひとつもらばやまちりも山やまとことはの葉

と：科とがありて人ひとを斬きるとも軽かるくすなかたないかす刀ひともただひと一つなり

ち：知恵ちえのう能みは身みにつひときぬれど荷ににならず人ひとはおもんじひとはづるものなり

り：理りも法ほうも立たたぬ世よぞとてひこころきやすき心こころの駒こまの行いくこころにまかすな

ぬ：ぬす人びとはよそおもより入いると思おもうかや耳目じもくの門かどに戸とぎしひとよくせよ

る：流通るとおすと貴人きじんや君きみが物ものがた語ことりはじきめて聞きける顔かおもちひとぞよき

を(お)ぐるま あくごう 小車のわが悪業にひかれてやつとむる道をうしと見るらん
わたくし す 私を捨てて君にし むか 向はねば うらみ うらみも起り おこ 述懐もあり じゅっかい
がくもん しお 学文はあしたの潮の なみ ひるまにも おしづ なほ静かなれ
よ ひと 善きあしき うえ 人の上にて み 身を磨け とも 友はかがみと なるものぞかし なるものぞかし
たね みず 種となる みち 心の水に ほか まかせずば な 道より外に なが 名も流れまじ
れい ひと 礼するは ひと 人に ひと するかは ひと 人を おおかた また あるじ さぐるは ひと 人を ひと さぐるものかは わ
そ ふたつ そしるにも あるべし ふたつあるべし 大方 大方は 主人 主人のため なるもの になるものと し 知れ
つ つら つらしとて うら 恨みか え へすな わ 我れ ひと 人に むくいむくい 報ひ報ひて はてしなき はてしなき よ 世ぞ
ね わ ねがはずば へだ 隔ても あらじ 隔ても いつはりの 世に まこと まことある 伊勢 伊勢の かみがき 神垣
な いま 名を のこ 今に残し ひと おきける ひと 人も 心 人も 心 心も 何か 何か おとらん おとらん
らく とき 楽も あ 苦も あ 時すぎぬれば 跡 跡も なし なし 世に 世に残る 名を 名を ただ ただ 思ふべし 思ふべし
む むかし 昔より みち 道ならずして おごる おごる 身の 身の 天の 天の せめに せめに し し あは あは ざる ざる は は なし なし
う いま 憂かりける 今 今の 身こそ 身こそ は は 先の 先の 世と 世と おも おも へば へば いま 今 ぞ ぞ 後の 後の 世ならん 世ならん
み あ(い) 亥に ふして 寅には 起くと 起くと ゆふ 露の 身を 身を いたづら いたづらに あ あ らせ せ じが じが ため ため
の の の がる がる まじ まじ 所を 所を かねて かねて 思ひ 思ひ き きれ 時 時に 至りて 至りて 涼 涼 しか しか る る べし べし
お おも 思 ほ ほ へず へず 違 違 ふ もの なり なり 身の上 身の上 の の 欲 欲 をは は な なが れて れて 義 義 を を 守 守 れ ひと
く くる 苦し くと くと すぐ すぐ 道 道 を行 け 九 九 曲折 折の 末 末 は は 鞍馬 馬の さ さ かさ さま の の 世 世 ぞ ぞ
や わ や は は ら ぐ と と 怒 怒 る を い いは ば ば 弓 弓 と と 筆 筆 鳥 鳥 に に ふ た つ の つ ば さ さ と と を を 知 知 れ
ま まん 万 能 能 も も 一 一 心 心 と と あ あり 事 事 ふ する に に 身 身 ば ば し 頼 む なる 思 思 案 案 堪 堪 忍 忍

け：賢不肖もちひ捨つると言ふ人も必ずならば殊勝なるべし

ふ：無勢とて敵をあなどることなかれ多勢を見ても恐るべからず

こ：心こそ軍する身の命なれそろゆれば生き揃はねば死す

え：回向には我と人とを隔つなよ看経はよししてもせずとも

て：敵となる人こそはわが師匠ぞとおもひかへして身をもたしなめ

あ：あきらけき目も呉竹のこの世より迷はばいかに後のやみぢは

さ：酒も水流れも酒となるぞかしただ情けあれ君がことの葉

き：聞くことも又見ることも心がら皆まよひなりみな悟りなり

ゆ：弓を得て失うことも大将の心一つの手をばはなれず

め：めぐりては我が身にこそは事へけれ先祖のまつり忠孝の道

み：道にただ身をば捨てむと思ひとれかならず天のたすけあるべし

し：舌だにも齒のこはきをば知るものを人は心のなからましやは

ゑ：酔へる世をさましもやらでさかづきに無明の酒をかさぬるは憂し

ひ：ひとり身をあはれと思へ物ごとに民にはゆるすところあるべし

も：もろもろの国や所の政道は人に先づよく教へ習はせ

せ：善に移り過れるをば改めよ義不義は生れつかぬものなり

す：少しきを足れりとも知れ満ちぬれば月もほどなく十六夜のそら

空手道二十訓

ふなこし
船越 義珍

- 一 空手道は礼に始まり礼に終ることを忘るなからてどう れい はじ れい おわ わする
- 一 空手に先手なしからて せんて
- 一 空手は義の補けからて き たす
- 一 先づ自己を知れ而して他を知れま じこ し そ た し
- 一 技術より心術ぎじゆつ しんじゆつ
- 一 心は放たん事を要すこころ はな こと よう
- 一 禍は懈怠（油断）に生ずわざわい けたい しよう
- 一 道場のみの空手と思ふなどうじよう からて おもう
- 一 空手の修業は一生であるからて しゆぎよう いっしよう
- 一 凡ゆるものを空手化せよ 其処に妙味ありあら からてか そのところ みようみ
- 一 空手は湯の如し 絶えず熱度を与えざれば元の水に還るからて ゆ ごと た ねつど あた もと みず かえ
- 一 勝つ考は持つな 負けぬ考は必要か かんがえ も ま かんがえ ひつよう
- 一 敵に因って轉化（転化・変化）せよてき よ てんか いくき きよじつ そうじゆう
- 一 戦は虚実（正攻法・奇襲）の操縦（組み合わせ） 如何に在りひと てあし つるぎ おもえ いか あ
- 一 人の手足を剣と思へだんし もん い ひやくまん てき
- 一 男子 門を出づれば 百万の敵ありだんし もん い ひやくまん てき
- 一 構は初心者に 後は自然体かまえ しょしんしゃ あと しぜんたい
- 一 形は正しく 実戦は別物かた ただ じっせん べつもの
- 一 力の強弱 体の伸縮 技の緩急を忘るなちから きようじやく たい しんしゆく わざ かんきゆう わする
- 一 常に思念工夫せよつね しねんくふう